

■優勝決定戦の見どころ

コロナ禍に翻弄された第46回北海道学生アメリカンフットボール選手権は最終節の3日、1部Aブロック首位の北海道大と同Bブロック首位の北海学園大が優勝決定戦（午前10時、北海学園清田グラウンド）を行い、全道学生王者の栄冠とパインボウル（23日、仙台）の出場権を争う。2年連続27回目の優勝を狙う北海道大と、2年ぶり6回目の王者を目指す北海学園大。今季の初実戦となった第2節（10月18日）の両校の試合ぶりから、優勝決定戦の見どころを探る。

北海道大は札幌学院大に46-7で順当勝ちし、北海学園大は北星学園大に54-0で快勝した。攻撃力の目安となる獲得距離を比べると、北海道大はラン151ヤード、パス157ヤード、合計308ヤード。一方、北海学園大はラン201ヤード、パス177ヤード、計378ヤード。数字上はラン、パス、合計とも北海学園大が上回る。

攻撃では、初戦ということもあり両校とも2人のQBを併用した。

北海道大は坂田久尚（4年、大阪桐蔭高）が先発し、昨季新人賞の茨木大輔（2年、兵庫・六甲学院高）は第2Qから。坂田はエースRB中牟田晃基（4年、埼玉・浦和高）とWR黒田勇輝（3年、富山中部高）のランを軸に2TDを演出し、茨木も黒田とRB手塚将斗（3年、栃木・佐野高）のランで2TD。茨木はパスも122ヤードを投げたがTDはなかった。

一方、北海学園大は7TDのうち3TDをパスで決めた。先発の小笠原文瑠（2年、札幌・北海高）はエースWR佐藤玲太（3年、札幌光星高）とRB阿部龍太郎（4年、室蘭栄高）に長短のTD弾を投げ分け、第2Qから登場の河合祐輔（2年、札幌第一高）もWR佐藤玲哉（2年、登別明日高）へ20ヤードTDパスを投じた。

パスも織り交ぜるが攻撃の主体はランの北海道大と、QB、レシーバーが若返ったものの伝統のパスが光る北海学園大。1試合のみでも、両校の特徴が見えてくる。「やりたいことをやらせない」と北海道大・村井公寿監督、「パスを磨く」と北海学園大・高木幸樹ヘッドコーチ。安定したRBをそろえる両校だけに、パスの攻防が試合の鍵を握りそうだ。

守備も数字の上では北海学園大が優勢か。喪失ヤードは北海道大がラン112ヤード、パス104ヤード、計216ヤードに対して、北海学園大はラン11ヤード、パス60ヤード、計71ヤード。北海道大はQBサックからのファンブルボールをDL彌永貫至（3年、東京・桐朋高）がリターンTDする破壊力を見せ、北海学園大は、開始直後にDB長谷部悠（4年、北海高）がインターセプトリターンTDを決める隙の無さを見せた。また、キッキングゲームでは北海道大の黒田が72ヤードキックオフリターンTDを決めた。

2018年は21-3で北海学園大、2019年は50-20で北海道大と、しのぎを削り合うライバル2校。今年も注目の大一番だ。